

目的 現在家庭を中心とする生活現象に共通する特徴は、集合的主体としての家族からの個人の浮上という現象である。家庭経営学を含む生活論には、この新しい現象に対する認識と方法論が十分ではない。例えば家計構造における個計化現象、生活時間における家族共通時間の縮小、家計補助ではない女性の就労化、これらは、家族と個人、家庭生活と個人生活の関係性に関する方法論を必要としている。ところで近年目覚ましい発展を遂げている欧米の家族史研究は、民衆の家族の歴史的な動態を把握するための重要な方法論を開発してきており、特に家族と個人の関係に着目して家族の動態を解明しつつある。そこで本研究は、「家族戦略」、「ライフコース」の2つの概念をとりあげ生活論への活用を検討する。

方法 近年の家族史研究の流れから、特にTAMARA K. HARVEYを中心に、主要な問題意識と研究方法をつかむ。特に、「家族戦略」「ライフコース」概念について検討し、家族と個人の動態把握の方法を検討する。

結果 「家族戦略」、「ライフコース」は行高者としての家族メンバーに焦点をあて、家族員が生活を分担し資源を分配した方法と、外的制約の中でとった戦略とその決定プロセスなど、家族内の動的なプロセスとメンバー間の相互作用に着眼する。外部環境に制約されて集合的共同単位としての家族が行う意思決定と個人のそれとの関係、緊張や葛藤、戦略の組み替えのプロセスから、歴史過程の中で動的な家族把握の方法を提起している。集合的共同体としての家族と個人の関係把握の視角は現代にも適応可能と思われる。